故本會評議員理學博士小川琢治先生肖像

小川孫治

論の誤らざるを立證せんとしてあることが明に窺はれる點である。

兩博士とも問題は既に解決したと云はれてあるが、而もその間に相容れないものがあるのを思ひ、なほ論爭自體の發展の迹を顧みる際問題を解決に導くもの、將來に於ける我が美術史、考古學の學問的進歩に俟つべきであることを思はざるを得ないのである。（「法隆寺論攷」菊版四九四頁、定價五圓五十錢、地人書館發行、「法隆寺再建非再建論爭史」菊版三六八頁、定價三圓八十錢龍吟社發行）〔毛利久〕

彙報

昭和十七年度史學科　卒業論文題目

▼國史專攻　（一四名）

「安土桃山時代に於ける社會進展に關する一考察」　淺井一郎

「鎌倉武家社會の一考察」　織田昭磨

「日本藝術の精神史的研究」—中世都市と農村の趨向—　北原一敏

「洋學に對する歴史的考察」　鈴木恒生

「德政一揆を通じて見たる室町時代の世相と庶民の擡頭」　千足宏

「吉利支丹文化の渡來について」　西瀬戸厚美

「中世近世過渡期の武士階級に關する一考察」　奏密

「中世末期の天下統一の思想」　平田守德

「鎌倉時代の歴史思想について」　平松令三

「足利幕府の對明貿易」　廣海浩二

「北畠親房と其の時代」　宮脇信久

「中世末期社寺領崩壞に關する一考察」　守田長兵衛

「中世海外發展史の文化史的考察」　藻場一海

「近世文化の一考察」　渡部是

▼東洋史專攻　（十名）

「關中法と葉變法」　大杉正雄

「清代團練鄉勇について」　殿界美房

「地丁銀について」　野邊正盛

「清末教案の一考察」　長谷川一郎

「河北三鎭の成立とその變遷」　藤田國雄

「唐代通貨現象に就て」　眞島行雄

「春秋戰國時代の宗族」　柳田陽一

「支那上代に於ける請雨の儀禮に就いて」　山口格太郎

「五代時代の佛教に關する二三の考察」　善峰憲雄

「壬生兵變の一考察」　李丙周

▼西洋史專攻　（七名）

「米國史に於ける「フロンティアの消滅」と其の問題」　青島晃
「ブルクハルト」　井上肇
「ロシヤに於ける農奴制の成立」　河村盛一
「十八世紀前半のフランス社會についての一考察」　北川三郎
「侯爵タルジアンソンとその時代」　古橋直樹
「アメリカのコンモン・ローに就いての一考察」　森田隆佳
「アメリカ合衆國の成立とその思想」　康段鉉

▼地理學專攻（十名）

「泰國林産資源の日本地政學的研究」　阿部正道
「南米國境問題の研究」　池田光二
「支那に於ける繭業の地理學的考察」　植村元覺
「西太平洋に於ける軍事地理的研究」　大田原尚清
「鎌倉時代の歴史地理學的研究」　河畑文朗
「濠洲の地理學的考察—白濠主義を中心として—」　河地貫一
「湖廣低地治水の意義—地政學的考察—」　河野道博
「滿洲國開拓民問題の研究」　曾田紀一郎
「比律賓群島の地政學的考察」　戸川俊正
「印度支那に於ける交通組織の新構成」　堀川倪

史學研究會大會

毎年秋の學界の最も大きな行事の一つである本會大會は菊薫る十一月二十二日二十三日の日曜、神嘗祭の兩日に亘つて行はれ、第一日は公開講演會、並びに晩餐會、第二日は見學會として本年は知恩院を選び寺寶を拜觀することになつた。

講演會　二十二日午後一時半より樂友會館講演室に於いて開催當番の小牧教授司會の下に東京大學より平泉澄教授を迎へ、本學那波教授と共に次の講演が行はれた。來會するもの二百餘名、碩學の縫答を傾けての熱講に秋日の暮れ易きを嘆じて薄暮盛會裡に散會した。

一、唐末五代に於ける佛寺の俗講に就いて　本學教授　那波利貞氏
一、承久の御企と源實朝　東大教授　平泉澄氏

なほ右の二講演は追つて本誌に掲載される豫定である。

晩餐會　例年は文學部の綜合大會の一として、晩餐は京大倶樂部または各科の別個の催しとなつてより、久しく行はれなかつたが、今年は復活して、講演會終了後直ちに席を改め、午後六時過ぎ同會館大食堂に開かれた。本日の講師平澄、那波兩博士を中心に、史學科の教官の殆ど全部各研究室員、卒業生それに學生の參加もあつて參會者約四十名、時局下物資不足による貧しい食卓も賑かな會話と豊かな知性とによつて進められた。

見學　朝來晴雲低く垂れて紅葉を誘ふ時雨模樣の東山に、知恩院寺寶の拜觀を得んとて集る篤學好古の士は、開場定刻十時に先立つ頃より續いて參山した。寺務所玄關に假に設けられた受附に

用意されてゐる出陳目錄は、匆々の間に成るとは云へ、國史研究室の諸氏によつて簡潔に解說されて恰好の案內書となる。又會場に宛てられた內對面所には十數箇の電燈增設されて、その煌々たる輝きは廣い場內の隅々まで行渡つて心ゆくばかりの縱覽を期されてゐる。

正面中央には國寶阿彌陀如來立像一軀、ならびに近頃世に知られた國寶善導大師立像一軀とが安置されてゐる。何れも鎌倉前期の壯麗な作品であるが、特に後者は本學國史研究室所藏の明王院文書によつて由緖が明かなものであり、且つ百萬遍知恩寺の國寶善導大師畫像と像容を同じうしてゐることも注意されてゐるところである。

古來朝家の御信仰厚かつた當院には宸翰が數々傳襲されてゐるが、その中にも後奈良天皇「知恩敎院」勅額御下書、同じく阿彌陀經一卷、これは御父後柏原天皇第三回御聖忌御回向の御染筆になり御奧書に「知恩敎院者海內名藍」と書かれて、當院への御歸依の程が拜察される。

展觀のうち最も數多いものは古經類であつて、世に華頂山古經として知られるものである。これは幕末頃當山にあつた鷲尙徹定師の終世の苦心によつて蒐集されたところであり、內外の古寫經古版經の夥しい蒐積を誇つてゐる。唐成亨四年の筆寫に係る國寶大樓炭經卷三をはじめ唐寫經、大方廣佛華嚴經卷六十八などの朝鮮經、就中奈良朝の書寫の奧書を有するもの多く、光明皇后御願になる時非時經、超日明三昧經卷上をはじめとして光覺願經數點あり、又長阿含經はその奧に罫紙に書寫せる旨を明記して、當時の料紙の紙質を知ることの出來るのも興味深い。

その外源空の書寫ならびに施入と傳へられ、壽永二年の奧書を有する十二門論疏下一帖、片假名交りの和漢朗詠注上や四季に關する雜事百條行のものゝ紙背に記された順次往生講式は文治二年の奧書をもち、當時の樂藝を知る好資料である。

法然上人に關する繪畫には、室町頃の筆に成る畫像、及び國寶の行狀繪圖四十八卷、所謂弘願本一卷、冷泉爲恭の模寫本、圓光國師贈號繪詞三卷等展觀されて、それ〴〵畫趣に興をそゝるものがある。

文書には足利將軍代々の一枚起請文は當院との交涉を知る好資料であり、不斷念佛之誓狀は安土桃山時代の士庶の信仰を如實に示してゐて、文書の中に洛中洛外の庶民殊に商工業者の名が多く記されてゐる。知恩院造立勸進札の版木は一人一文四十八萬人の結緣を求めたものであり、永享四年の記年がある。その背面は正和四年刻の法然上人像が描かれてゐる。永享十一年の選擇本願念佛集は延應元年版の覆刻であるが、出版文化に貢獻した當山の活動を示すものは尠くない。

知恩院寶藏の名品佳什は多く他に出陳されてゐて、當日はその神韻靈妙に觸れることが出來なかつたのは遺憾であつたがそれにも拘らずなほかくも多數の逸品を多く展示し得たのは驚嘆すべきものがあり、蕭々たる秋雨の煙の中に閉場の刻迫つても引切らず參會し去り難てにする人々多くあつて、僅か一日の催しであるこ

とは殘多いものであつた。

終りに知恩院當局の方々に感謝の意を表する。

例　會

二月七日(土)午後一時半より、史學科第一教室に於て開催。左の兩氏の講演をきいた。來會者五十餘名。

天　妃　考　　愛　宕　松　男氏

北宋の代福建省莆田縣湄洲嶼に發し、以後南宋を通じて此の地方の鄉土神として崇拜されてゐた莆田の女神、順濟廟靈惠夫人は宋末南海貿易港としての泉州の繁榮に伴つて次第に海神としての地位を高めて來た。それが元朝の江南平定及び次で生ずる海運との關連によつて、朝廷の公認する海神となり遂にこの超鄉土的な一面を以て支那沿岸地方一帶に廣く分布するに至つた事情を說明したものである。

室町時代に於ける社會統制の統制　　本學助教授　藤　直　幹氏

追て本誌に揭載の豫定につき梗概を略す。

◇時野谷博士還曆祝賀會

昭和十六年十二月二十七日、日出度く華甲の壽辰を迎へられた本會評議員、京都帝大教授文學博士時野谷常三郎先生に對し、豫て知友門下生一同の間に組織せられたる、時野谷博士還曆記念會より太田喜二郎畫伯揮毫の御肖像畫二面、獻呈說文集「西洋史說苑」並びに金壹封を贈呈し三十有五年の永きに涉る博士の學德に報ゆると共に且嘉辰慶祝の微意を表する所があつた。

名譽教授　中村新太郎君訃

大正十三年以來昭和十三年に至る史學科に授業擔當として自然地理學概說或は地誌を講ぜられたる理學部中村教授は、昨春華甲を壽かれたが宿痾漸く革り昭和十五年十二月八日を以て薨去された。こゝに謹んで哀悼の意を表する。

本會評議員　小川琢治博士訃

哀　辭

京都帝國大學文科大學並ニ同文學部ノ史學科ニ業ヲ卒ヘタル生等一同、虔ミテ故京都帝國大學名譽教授帝國學士院會員正三位勳二等理學博士小川先生ノ靈ノ前ニ時花香燭ヲ獻ジテ哀悼追慕ノ衷款ヲ啓キ、恭シク冥福祈願ノ赤誠ヲ披キタテマツル。嗚呼哀シイ哉。

謹ンデ惟ミルニ　先生ハ和歌山縣ノ士林ニ出ヅ。明治二十九年七月帝國大學理科大學地質學科ヲ卒業セラレ、同四十一年五月京都帝國大學文科大學教授ニ任ゼラルルマデ約十二春秋、或ハ農商務技師トシテ鑛山局ニ官ヲ奉ジ、或ハ大本營御用掛トシテ清國ニ差遣セラレ、或ハ關東州民政署附調査官業務、或ハ統監府派出所調査課長トシテ、專攻ノ學術ヲ以テ遂年伸張スル　皇國ノ　天業

ヲ輔翼シタテマツリ、其ノ間明治三十三年一月ヨリ三十四年五月マデ佛蘭西國ヘ、同三十五年四月、三十七年九月清國ヘソレ〳〵差遣セラル。之ヲ　先生ガ技術官トシテ國事ニ盡瘁セラレタル期間トス。明治四十一年五月京都帝國大學文科大學教授ニ任ゼラレテヨリ、ソノ理學部ニ轉勤セラルルマデノ一十四年間ハ、地理學ノ研究ト門弟子ノ薫陶トニ專念セラレタル期間ニシテ、生等ガ耳提面命ノ恩寵ニ浴シタルハ此ノ間ニ在ルト共ニ、先生ニ於セラレテモ地理學ニ於テ最モ素懷ヲ達成セラレタル所、即チ自然地理學人文地理學・歴史地理學ヲ損益綜合シテ渾然タル新地理學ノ旗幟ヲ我ガ學界ニ揭揚シ、幾多ノ研究論著ヲ梨棗ニ上シテ學界ニ供スルト共ニ後進ニ範ヲ垂レ、創闢以テ開設初頭ノ我ガ京都帝國大學ノ地理學科ノ學風ヲ樹立シ斥拓以テソノ今日ノ隆興ノ基ヲ開カレタルハ、豈ニ啻ニ我ガ地理學科ノ幸福名譽タルノミナランヤ、ソモ〳〵マタ　皇國地理學界ニ一大躍進ヲ現ジタル偉勳ニシテ永ニ學者ノ記憶ニ新ナルベキナリ。先生マタ素ヨリ支那學ニモ深ク造リ支那地理研究テフ荒蕪ノ野ニ開墾ノ耒耜ヲ揮ハレ、大正五六年ノ交屢々禹域ニ渡ラレ、マタ同八九兩年ニ亘リテ歐洲米國ニ出張セラレ、學術研究會議議員トシテ夙ニ　皇國ノ大陸發展ノ當然性ト必然性トヲ唱道セラル。蓋シ是レ　皇國比來ノ國是ノ先知タルナカランヤ。生等幸ニ此ノ期間ニ　先生ノ講筵ニ侍シ、宏遠ナル識見ニ導カレ、博通ノ和言ヲ授ケラレ、叨ニ提撕ノ惠澤ヲ肆ニシ深ク薫化ノ恩地ヲ蒙ルコトヲ得、感激拜謝ノ至情ニ堪フルナシ。大正十年十二月理學部ヘ轉勤セラレテ後モ舊ニ依リテ生等ヲ顧念セラレ、昭和五年六月老ヲ告ゲラレテ後モ亦、師恩ノ高大ナル、誘披指導ノ芳情昔時ニ異ナルアルヲ見ズ。乃チ生等一同常ニ等シク先生ノ壽康ナランコトヲ祈念シタテマツリ、ソノ老イテ益々壯ナル音容ヲ仰イデ逐月隨年心ニ安ンズル所アリシニ、何ゾ圖ラン一昨十五日遽ニ逝場ニ向ハレテ復タ還リタマハズ、屬纊ニ時無ク、招魂只獻欷アルノミ。今十七日古洛東ノ名刹金戒光明寺ニ於ケル終焉ノ儀場ニ陪シテ、疇昔ノ恩寵ヲ拜謝シ、生前ノ學德ヲ追慕シタテマツリ、感慨寃ニ限無ク長恨焉ンゾ銷エム。伏シテ願クバ先生ノ靈靈生等一同ノ悃誠ヲ饗ケラレ、永ニ菩羅雙樹陰ニ無邊ノ勝福ヲ領セラレ、長ニ般若津頭ニ容與閑適シタマハンコトヲ。

昭和十六年歲次辛巳十一月十七日

京都帝國大學文學部史學科受業生總代

西田直二郎　敬白

故小川琢治博士略歴

明治三年五月二十八日　出生
同　二十九年七月十日　帝國大學理科大學地質學科卒業
同　年　同大學院入學
同　三十年一月七日　同大學院退學
同　年一月九日　任農商務技手、地質調査所地質課勤務
同　三十一年二月十五日　任農商務省技師、敍高等官七等、鑛山局勤務

同　年三月　敍從七位
同　三十三年一月二十四日　陞敍高等官六等
同　一月二十九日　御用有之佛國ヘ被差遣
同　三月十日　敍正七位
同　三十四年五月十六日　歸朝
同　七月二十三日　法朗西共和國政府ヨリ贈與シタルオフヒシエードラントリユクシヨンピユブリツク記章ヲ受領シ佩用スルコトヲ允許ス
同　三十五年四月十七日　陞敍高等官五等
同　四月二十五日　御用有之清國ヘ被差遣
同　九月十二日　敍從六位
同　三十七年七月六日　陞敍高等官四等
同　九月三日　大本營御用掛兼務ヲ命ス、御用有之清國ヘ被差遣
同　九月二十日　敍正六位
同　三十八年一月十九日　大本營御用掛兼務ヲ免ス
同　九月二十四日　關東州民政署付兼務ヲ命ス
同　三十九年三月三十一日　同兼務ヲ免ス
同　四月一日　明治三十七八年事件ノ功ニ依リ金三百圓ヲ賜フ
同　四十年四月五日　陞敍高等官三等
同　六月十日　敍從五位
同　八月十一日　統監府派出所事務官事務ヲ囑託ス、統監府派出所調査課長ヲ命ス
同　四十一年二月二十九日　同囑託ヲ解ク
同　五月二十二日　任京都帝國大學文科大學教授、史學地理學第二講座擔任ヲ命ス
同　四十二年九月三十日　授理學博士（推薦）
同　十二月一日　明治四十年四十一年韓國暴徒鎭壓事件ノ功ニ依リ勳五等瑞寶章及金二百二十圓ヲ授ケ賜フ
同　四十三年七月四日　御用有之清國ヘ被差遣
同　六月十日　韓國皇帝陛下ヨリ贈與シタル勳二等八卦章ヲ受領シ及ヒ佩用スルコトヲ允許セラル
同　九月六日　瑞典國皇帝陛下ヨリ贈與シタル「ワザ」第三等甲級勳章ヲ受領シ及ヒ佩用スルコトヲ允許セラル
同　四十四年一月二十五日　陞敍高等官二等
同　三月二十日　敍正五位
同　十二月二十六日　敍勳四等授瑞寶章
同　四十五年七月四日　清國大連旅順及奉天ヘ出張ヲ命ス
大正五年二月二十八日　敍勳三等授瑞寶章
同　五月一日　敍從四位
同　六月十九日　支那ヘ出張被仰付

同　十二月二十日　同右
同　六年一月十四日　歸朝
同　七月六日　支那ヘ出張被仰付
同　七年二月一日　陞敍高等官一等
同　五月二十一日　歐米諸國ヘ出張被仰付
同　十月二十九日　出發
同　九年六月二十五日　歸朝
同　十一月二十五日　學術研究會議員被仰付
同　十年五月三十日　敍正四位
同　九月二十一日　史學地理學第二講座擔任ヲ免シ史學地理學第二講座分擔ヲ命ス
同　十二月十九日　文學部勤務ヲ免シ理學部勤務ヲ命ス、史學地理學第二講座分擔ヲ免シ地質學第二講座擔任ヲ命ス
同　十二年三月十三日　本學圖書館商議會委員ヲ命ス
同　三月二十四日　敍勳二等授瑞寶章
同　十四年十二月十五日　補京都帝國大學理學部長
同　十五年二月二十七日　帝國學士院規程第二條ニヨリ勅旨ヲ以テ帝國學士院會員被仰付
同　七月二日　敍從三位
昭和元年十二月二十八日　依願京都帝國大學理學部長ヲ免ス
同　五年五月十五日　地質學第一講座分擔ヲ命ス
同　六月十八日　依願免本官（定年）
同　七月一日　敍正三位、特旨ヲ以テ位一級被進
同　八月十五日　帝國大學令第十三條ニ依リ勅旨ヲ以テ京都帝國大學名譽教授ノ名稱ヲ授ク
同　十一年十月十四日　教員檢定委員會臨時委員被仰付、第一部屬ヲ命ス
同　十二年三月十二日　同　被免
同　十五年九月十三日　同　被仰付
同　十六年十一月十五日　薨去

小川博士著作年表

◇單行本

〔書名〕	〔發行年、月〕
臺灣諸島誌	明治二九、二
百萬分一大日本帝國地質圖說明書（一部）	三三、六
二十萬分一地質圖高知圖幅及說明書	三四、三五
二十萬分一地質圖木本圖幅及說明書	三六、
地文學講義（共著）（地學雜誌附錄）	三七、
二十萬分一地質圖烏羽圖幅及說明書	三七、
構造地質學講義（地學雜誌附錄）	三八、二・三・四
二十萬分一地質圖珠洲岬圖幅及說明書	三九、四〇
二十萬分一地質圖輪島圖幅及說明書	四一、
近畿地方の土地と住民	大正四、九
日本地圖帖	一三、一二
市町村大字讀方名彙	一四、一

日本地圖帖地名索引　一四、二
外國地圖掛圖　第一輯　一四、四
外國地圖掛圖　第二輯　昭和二、三
人文地理學研究　三、八
支那歷史地理研究　三、九
地質現象の新解釋　四、四
續支那歷史地理研究　四、八
戰爭地理學研究　一四、七
一地理學者の生涯　一六、一二

◇論文

〔題目〕　〔掲載雜誌書〕　〔發行年、月〕
スバルタカス劍優に說く　文園　明治二二、三
むろ路のしるべ　一高校友會雜誌　二五、五・六
珊瑚礁の生成に就て　地質學雜誌　二七、一
革青石を有する噴出岩に就て　同　二七、六・七
英國第三紀火山岩噴出の順序に就て「ゲーキー」「ヂヤッド」兩氏の衝突　同　二七、一〇
包藏晶體の消光方向及び二色性を驗する方法　同　二七、一二
日本風景論を評す　同　二八、二
神岡鑛山產靑鉛鑛　同　二八、四
臺灣島　同　二八、五
伊豆半島石英安山岩略說　同　二八、九・一一
長石類　同　二八、一〇
神保氏採集黑龍江岩石の記事　同　二八、一二。二九、一
東土耳古土坦の地質探檢ボグダノヴッチ　同　二九、二
ベェネズェラ共和國々界の沿革（シーヴェルス）　地學雜誌　二九、三
淡路島始原界の橄欖岩輝紫岩並に褐簾花崗岩略說　地質學雜誌　二九、六
中央亞細亞の層位に就て　同　二九、六
東京附近の炭酸鐵化木に就て　同　三〇、一
山上氏新撰大地文學　地學雜誌　三〇、一
丹波高原北部基性岩迸出地方地質略說　地質學雜誌　三〇、二・三・六
戈壁は砂漠に非ず　地學雜誌　三〇、八
露西亞の人口調査の結果　同　三〇、一一
矢津昌永氏著中等地文學を讀む　地學雜誌　三一、一
攜帶に便なる新發明の水銀氣壓計に就て　同　三一、一
北西亞米利加ユーコン江上流の產金地クローンダイク　同　三一、二
矢津昌永氏中等地文學の定義を駁す　同　三一、三
フナフチ珊瑚島鑽掘の結果　同　三一、三
西亞非利加に於ける英佛兩國疆界の衝突

絶東に於ける膠州灣	同	三一、	四
近江產長石及び雲母に就いて	同	三一、	五
支那山東省の石炭	同	三一、	五
ブワスコー・ダ・ガマの傳	同	三一、	六
地理學とは何ぞや	同	三一、	八
地質學の一新方面地相學の梗概	同	三一、	九
新撰大地誌前編卷之一（山上萬次郎氏編）	同	三一、	一一・一二
非律賓群島略誌	地質學雜誌	三二、	一
市之川礫岩層の時代に就て	同	三三、	一—六
小學校地理教授上の注意	地學雜誌	三三、	二
旅　行　法	同	三三、	四
日本の海岸線の種類	地質學雜誌	三三、	二・三・五
日本群島地質構造論	地學雜誌	三三、	六
西班國衰頽の地學上原因（メルケル氏）		三三、	六—一二
地球内部に關する學說	同	三三、	七
伊豫國市之川安質母尼鑛山	地質要報	三三、	一一
伊豫國市之川安質母尼鑛山地質調査報文	日本鑛業會誌	三三、	
羽前國西南部の第三紀層附十露盤の成因	地質學雜誌	三三、	二
歐羅巴旅行談	地學雜誌	三四、	七・八
海軍水路部新刊圖書に就て	同	三四、	九
秩父巡檢所見	同	三四、	一〇・一一
ドローネー氏の應用地質學	同	三四、	一二
日本群島地質構造論（元結）	同	三五、	一
リヒトホーフエン氏東亞地相	同	三五、	一
英國及殖民地	同	三五、	二・四
半田山山崩調査報告	同	三五、	三
噴出岩類命名法　佛國委員提出案	地質學雜誌	三五、	三
清國福建省鑛產小誌	地學雜誌	三五、	四
北　清　雜　記	同	三五、	八
日本文明に及ぼせる地理上の影響	同	三五、	九
第九回萬國地質學會議（維也納）	同	三五、	九
旅行法（地圖の撰擇及用法）	同	三五、	一一
北支那化石發見地の略報	地質學雜誌	三六、	一
ツエブリッツと海洋地文學	地學雜誌	三六、	一
內蒙古東部地勢並地質一斑	同	三六、	一
外國地名及人名書き方及稱へ方調査表を讀みて			
	同	三六、	一
四國中部の結晶片岩	同	三六、	二
近江產黃玉石包藏物としての燐黃石	同	三六、	七
山東省北部旅行日程	同	三六、	七・八
露領の石炭と西伯利亞鐵道の給炭	同	三六、	八

旅行法（會員術）　同　三六、八
第九回萬國地質學會議に於ける議題　地質學雜誌　三六、八
溫泉成因の最新說　地學雜誌　三六、九
地理檢定試驗漫言　同　三六、九
北淸旅行談（直隸山東）　同　三六、一〇
洋底の凹凸を表はす萬國術語　同　三六、一〇
第八回萬國地理學會議（ワシントン府開設）の豫告　同　三六、一〇
濃尾地震後地形變化測定の結果（萬國測地學會委員會報告）　同　三六、一一
地學雜誌第十六年發行に就いて　同　三七、一
人生に及ぼす地理學的影響（牧口常三郎君著人生地理學の批評）　同　三七、一
泰山及曲阜　同　三七、一・二
甲斐國倉澤重石鑛床概況報文　地質要報　三七、
加賀國山中溫泉地質調査報文　同　三七、
支那鑛產地の話　日本鑛業會誌　三七、
直隸省北部內蒙古高距表　地質要報　三七、
北支那地質一斑　地質學雜誌　三七、三
成田安輝氏拉薩旅行　地學雜誌　三七、三
ジウス、リヒトホーフエン、クロポトキン三氏の亞細亞地帶構造說　地質學雜誌　三七、四
日露交戰地方の重要なる地圖に就きて　地學雜誌　三七、四
熱河及蒙古東部の地質　地質學雜誌　三七、五
間宮林藏先生滿洲及樺太探檢事蹟　地學雜誌　三七、五
加賀國山中溫泉地質視察概要　同　三七、六
新鑛物苗木石に就きて　地質學雜誌　三七、七
第二十世紀の初に於ける日本を讀む　地學雜誌　三七、七
「日本鑛物誌」に就きて　同　三七、八
間宮林藏先生の生涯と事蹟　同　三七、九
北支那の地理學的探究に就いて　地學雜誌　三八、一
第八回萬國地理學會議の經過　同　地質學雜誌　三八、一
北支那化石產地　三八、三
構造地質學講義　地學雜誌　三八、二―四
アンツ氏山東省中央山地の旅行　同　三八、二
遼東半島の地質一斑　同　三八、三
北支那のカムブリア層　同　三八、五・七
シンプロン隧道　同　三八、五
スコツト氏の英國南極探檢報告　同　三八、六
ライン氏「日本」第二卷再版成る　同　三八、六
ジウス先生「地相論」の英譯出づ　同　三八、七
樺太島占領と地名の命名法　同　三八、八
間宮林藏氏の樺太探檢と近藤守重高橋景保兩氏

の卓見（外一氏と共著）　同　三八、九
樺太經營家としての近藤守重　同　三八、一〇
長崎近傍金鑛床概査報告　地質要報　三八、
復州五湖嘴炭田概査報文〕　大本營　三八、
煙臺炭坑四近地質概査報告〕
內蒙古に於ける八谷君を懷ふ　地質學雜誌　三九、三
ヰリス氏の支那地質探檢結果略報　地學雜誌　三九、三
東亞地相雜觀　地質學雜誌　三九、四
盛京省南部地質及鑛產（井上禧之助氏と共著）
地學雜誌　三九、四・五・一一・一二
山嶽の成因に就て　山岳　三九、四
東京地學協會第二十七年總會陳列の樺太島圖書
物品に就て　地學雜誌　三九、六
日本群島は褶曲山岳に非ざるか　地質學雜誌　三九、六
シナイ半島　地學雜誌　三九、七
西南日本太平洋岸の地相　同　三九、九
プエスブヰオの大噴火　同　三九、一二
滿洲產業調査資料（鑛產）（第二班）
滿洲產業調査資料　三九、
西南日本地質構造概觀　地質要報　三九、
西南日本地質構造論（日本群島地質論第二稿）
地學雜誌　四〇、二—四
ジュネーヴに開かるべき第九回萬國地理學會議
同　四〇、三
山上萬次郎氏著日本帝國政治地理を讀みて　同　四〇、五
島川毅三郎君を悼む　同　四一、七
佛國新刊地質學文書　同　四一、九
モンテシュー・ド・バロール氏「地震地理學」
同　四一、一一
間宮林藏先生韃靼海峽發見の意義　同　四二、八
長白山附近の地勢及松花江水源　附完顏城址考
史學研究會講演集　四二、九
北極探檢史談　藝文　四三、二
みち草　同　四三、五
白瀨中尉南極探檢の計畫に就て　同　四三、五
みち草　第二東　同　四三、六
間島地質及鑛產調査書　間島產業調査書　四三、
近世西洋交通以前の支那地圖に就て　地學雜誌　四三、八—一〇
地理科教授に就て　滋賀縣教育會雜誌　四三、八
山海經篇目論　藝文　四四、五
日本群島　日本海上史論　四四、七
南極到達の競爭　太陽　四四、七
山海經篇目論補遺　藝文　四四、八
山海經の錯簡に就て　同　四四、一〇
戰略地理上より見たる漢口附近の地勢
太陽　四四、一一

天明文化年間の北方探檢　地學雜誌　四四、一二
支那上古の地誌としての禹貢と山海經の價値　藝文　四五、二
支那旅行概報　附燉煌石室遺書　地學雜誌　四五、二
アムンゼン氏の南極到達　附開南丸の消息　太陽　四五、五
支那上古の天地開闢及洪水傳說　藝文　大正二、一
英國南極探檢隊の運命　太陽　二、三
信濃國梓川の氷河遺跡　地學雜誌　三、一
常念山脈南部に於ける氷河作用に就て（田中氏と共著）　同　三、九・一〇
九州の石佛　國華　三、九・一〇
支那戰國以前の地理上智識の限界　藝文　四、四
山東省經營の私見　太陽　四、四
讃岐高松附近の農村　讃岐　四、四
戰爭の地理的意義及其研究に就て　地學雜誌　五、一
戰時の歐洲地理學界　史林　五、一
崑崙と西王母　藝文　五、一・二
日支經濟關係の將來　太陽　五、四
黃河水源問題　史林　五、四
黃河下流平地の戰略地理的意義　地學雜誌　五、六・七
朝鮮半島西側の地貌　史林　五、一〇
支那の鑛產に就て　東亞經濟研究　六、
北支那の地勢及地質概觀　地學雜誌　六、九・一〇
伊能忠敬　史林　六、一〇
戰爭地理學に與へたる世界戰爭の影響　同　七、七
水經と水經注　藝文　七、八・九
郭忠恕墓輞川圖卷考　同　七、一〇
歐洲西部戰場の地理觀　史林　八、一
伊勢の第三紀層に就て　島津製作所標本時報　八、一
子爵田中阿歌麿著諏訪湖の研究を讀む　史林　八、四
愚母惡妻主義の女子教育を改良せよ　太陽　八、四
支那に於ける本草學の起源と神農本草經　史林　八、一〇
伯林行　藝文　九、一一
支那上古の開闢傳說補遺　同　一〇、四
利瑪竇の「萬國全圖」と「幾何原本」に就て　史林　一〇、七
ダンテの「水と陸」とに就いて　藝文　一〇、九・一〇
東洋文化と西洋文化　和歌山縣立耐久中學校　一二、
東西文化民族の地震に關する神話及び傳說　藝文　一三、一
京都帝國大學地質學教室の「關東地震調査概報」

地學雜誌		一三、一
關東地方の地勢及び地質構造	地　球	一三、二
ジウスよりフムボルトへ地震成因說の新轉向	同	一三、三
深發地震の本性	同	一三、三—五
震災後の悲しい追憶	同	一三、四・五
相模灣の所謂陷沒と隆起の意義如何	同	一三、六
溫泉に就て	同	一三、七
長崎縣立中學校所見一斑	同	一三、八
地文及地理學上より見たる九州西北部	地　球	一三、九・一二
戰場としての支那の地勢に就て	同	一三、一〇・一一
古刀銘の研究	史　林	一四、一
都市としての大阪の地理的價値	大阪文化史	一四、八
東亞地質構造論から觀た地震現象の說明	地　球	一四、八・九
火山現象に就て	同	一四、一〇
海岸に就て	同	一四、一
刀劍の地理學的研究	同	一四、二・三
支那小說の地理	同	一四、二—六
水滸傳の地理雜觀	同	一四、三—六
日本紅簾片岩の成因	同	一四、五
但北地震概報	同	一四、六
紀伊水道津浪の古記錄	同	一四、七
エミル・アルガン氏亞細亞構造論	同	一四、七
科學としての地理學	同	一五、一・二
人類の土地に及ぼす影響	同	一五、三
人文地理學上より見たる日本の村落	同	一五、四
北支那先秦蕃族考　內藤博士還曆祝賀支那學論叢		一五、五
人文地理學上より觀たる日本の都市	地　球	一五、五・六
新日本史　地理學篇　地質學篇　新日本史		一五、七
太平洋地域の探檢と開發	地　球	一五、七・九・一〇
西宮市宮水保護調査會第一回鑿井調査報告書	昭和二、	
地質現象相互關係の解釋	地　球	二、一
相州鍛冶系圖考	史　林	二、一
日本群島の地貌に及ぼす地內力の結果	地　球	二、二
東亞弧狀構造線の新解釋	同	二、三
地震損害輕減の可能性に就て	同	二、四・五
大陸及大洋地域の弧狀輪廓の意義	同	二、五
丹後峰山地震の現象と其解釋	同	二、六
造陸造山兩作用の性質	同	二、七
造山作用の地震地質學的解釋	同	二、八・九
九州刀工分布の歷史地理的意義	同	二、一〇・一一
直線狀構造線及び地內力效果の綜攬	同	二、一二

殷人の分布と其の經路に就いて　史　林　三、一
居住地理學の問題としての日本住宅　地　球　三、一・二
穆天子傳考　狩野教授還曆記念支那學論叢　三、二
北支那先史時代の人類に就きて　地　球　三、三
人文地理學の一科としての政治地理學　同　三、四
政治學者の觀たる國家　同　三、五・六
天津北疆博物院の古物生學的並に考古學的事業　人類學雜誌　三、七
エ・リサン
國境に就いて　地　球　三、七・八
長石の識別法に就いて　同　三、九―一二
刀劍目利の源流附相州鍛冶補考　史　林　四、二　三、一〇
岩石學用顯微鏡の使用法　地　球　三、一〇―一二　四、一・二・五
散氏盤地名考　高瀨博士還曆記念支那學論叢　三、一二
日本海沿岸の火山作用に就て　日本學術協會報告　三、
戰爭の地理學的考察　地　球　四、一・三・四・七・一二　五、二―五、八、一一
火山岩の季晶作用(Hystatocrystallization)に就て　地質學雜誌　四、六
造岩鑛物とその顯微鏡識別法　地　球　四、六
阡陌と井田　支那學　四、六
歷史地理學上から觀た東亞文化の源流　思　想　四、七
火山岩の季晶作用に就て　地　球　四、七
支那古代に於ける中央亞細亞の交通路に就て　地學雜誌　四、七・九
山崎直方氏を悼む　地質學雜誌　四、八
東亞地域の概觀　地　球　四、八・一〇
東京帝國大學教授山崎直方君を悼む　地　球　四、九
米澤訪書記　支那學　四、一〇
(東海地方)　總說　日本地理風俗大系　四、一〇
(關東北部及び奥羽)總說　同　四、一一
戰場としての東北地方
唐津の摩崖石佛　同　五、一
北海道總說　同　五、二
(九州地方)總說　同　五、三
自然科學の研究に就いて　和歌山縣立和歌山中學校々友會誌　五、三
天津北疆博物院の古生物學的並に考古學的事業　考古學論叢　五、五
エ・リサン
(越中地方)概說、黑部川流域地方、富山平野附近、戰略上から見た甲斐國、戰略上中間地帶の意義、甲府盆地　日本地理風俗大系　五、五
(中央及び北陸地方)總說　同　五、六
南支總說　世界地理風俗大系　五、七
地理學講座開講に就いて　地理學講座　五、八

(四國及び瀨戸內海)總說、地理的特徵　日本地理風俗大系　五、八
(朝鮮地方)總說　同　五、九
地學雜誌創刊四十二年間の本邦地理學界の回顧と前途の希望　地學雜誌　五、一〇
(中國地方)總說　日本地理風俗大系　五、一〇
(房總地方)人文地理概觀　同　五、一一
地理學序論　地理學講座　五、一一。六、二
伊豆地震に於ける地盤變動に就て　地　球　六、一
(近畿地方下)總說　日本地理風俗大系　六、二
氣水石三圖の相互關係　岩波講座、地理學　六、三
(中央アジヤ)總說　世界地理風俗大系　六、四
(關東總論)總說　日本地理風俗大系　六、四
日本火山學界創立の計畫に就て　地　球　六、五
戰爭地理學(太田喜久雄氏と共著)地理學講座　六、六—七、二
(臺灣)總說　日本地理風俗大系　六、六
(近畿地方上)總說、地理的特徵、戰略地理上から觀た近畿(太田喜久雄氏と協作)　同　六、七
陸界地文學の形態學的考察に就いて　地　球　六、七
大　東　京　日本地理風俗大系　六、一〇
中央日本の洪積世氷河作用に就いて　地　球　六、一一・三、一二
經緯鏡臺に依る長石の識別法(春本篤夫氏と共著)　岩波講座、鑛物・岩石學　六、一二
(世界地理)總論　世界地理風俗大系　六、一二
(日本地理)總說　日本地理風俗大系　七、二
日本の氷河時代に關する問題と其の研究法　岩波講座、地理學　七、三
第四紀火山活動に對する氷河作用の意義　火　山　七、五
朝鮮半島の地理的位置の意義　地理教育　七、六
氷河作用と氷成層系　同　七、八—一〇
中央日本氷成堆積物の分布　地　球　七、一二。八、一—三
支那古代地理學史　岩波講座、地理學　八、二
地質學史(笹倉正夫氏と共著)　岩波講座、地質・古生物學　八、九
一地理學者の生涯　地理教育　八、一〇。九、一・一二。一〇、一—三・六・八—一二。一一、一—七・九—一二。一二、一—三
中央及び東北日本の氷成堆積物分布に就いて　地　球　九、一—二
盧山の眞面目　同　九、五

地文現象の人生に對する影響として觀た九月二十一日の颱風　地　球　九、一一
日本聚落の特性　地理教育臨時增刊「聚落地理學論文集」　一〇、一
小藤先生の長逝を悼む　地　球　一〇、四
交通の歷史地理學的考察　地理教育　一〇、八
戰爭の歷史地理學的考察　同　一〇、一〇
昭和十年の回顧と十一年の展望　同　一一、一
先秦時代の歷史地理學的文獻と其の研究法に就いて　地理と經濟　一一、二—七
太平洋上に於ける日本帝國の位置　地理教育　一一、八
古代支那の地理學文獻について　地理と經濟　一一、八—一二
古本道樂(如舟老人)　科學ペン　一一、一一—一二
小如舟刀劍談　文藝春秋　一二、
昭和十二年を迎へて　地　球　一二、一
千七百餘年前の圍碁戰蹟(櫻翁)　圍碁春秋　一二、二
千六百五十年前の圍碁戰蹟(櫻翁)同　一二、三
戰場として觀たる支那本部　地理と經濟　一二、一—四
高等學校高等科地理教授要目の改正に就いて　地理教育　一二、四
開元天寶時代の打碁(櫻翁)　圍碁春秋　一二、五
最古の決戰譜爛柯圖(櫻翁)　同　一二、六・七・九・一〇・一二。一三、三
北支那黃土地域に於ける戰爭の地形的考察　地理教育　一三、九
小如舟書屋刀劍談　文藝春秋　一三、三・四
一千餘年前に行はれた金盞爭奪戰譜金花槐圖　圍碁春秋　一三、五
唐代の後勁賈楊兩待詔の對局碁譜　同　一三、六・七・八
北支那大平野の諸戰場とその地名の意義及び讀み方　地理教育　一三、八
アルバース氏等積圖錐圖法について　東方學報　一三、一〇
北宋元祐年間聯碁　成都府四仙子圖　圍碁春秋　一三、一一。一四、三
聖戰第三年に入るに臨みて　地理教育　一四、一
小如舟書屋圍碁談　中央公論　一五、四
置碁の要訣　圍碁春秋　一六、一—三
日本刀劍史の黎明期に於ける大和鍛冶　紀元二千六百年記念史學論文集　一六、四
序文　龍門石窟の研究　一六、六

◇歐文著述

Outlines of the Geology of Japan. Descriptive Text to accompanying the Geological Map of the Empire on the Scale 1 : 1,000,000. p. 1-74. Imper. Geol. Survey of Japan. Tokyo, 1900. 1902.

On the Geotectonic of the Japanese Islands. Compte rendue de la Xème Sersion, Congrès Géologique Internatio-

nal, Mexico, 1906, 1907.
Notes on the Volcanic and Seismic Phenomena in the Volcanic District of Shimabara, with a Report on the Earthquake of December 8th, 1922. Memoirs Coll. Sci., Kyoto Imp. Univ., Ser. B. vol. 1. 1924.
On the Great Earthquake of Kwanto in Central Japan, 1923. Japanese Journ. Geol. and Geogr. vol. 3. 1924.
Significance of Volcanism in the Mountain Building of Japan and the adjoining Pacific Islands. Pro. Pan-Pacific Sci. Congr. Australia, 1923. vol. 1. 1926.
On the Pleistocene Glaciation of Central Japan. Proceedings of the Imper. Acad. viii, 1932.
On a Type of Glacial Topography in the Northern Foothills of Tateshinayama, Shinano Province. Proceedings of the Imper. Acad. ix, 1933.
On a Probable Glacial Deposit at Iriya in Kitakami Mountains. Proceedings of the Imper. Acad. x, 1934.
On a Seismogenic Line in Kin-ki Provinces, Southwest Japan. Part 1. Great Earthquake of Northern Districts of Tango, 1927. Proceedings of the Imper. Acad. xii, 1936.

西洋史讀書會

大會 昭和十六年十一月二日午後一時より、於樂友會館開催、出席者、講演會七十餘名、晩餐會四十二名。

日米會談豫測を許さず、日夜決戰體制の確立に邁進される超非常時に、本年も例年の通り盛んな學會を迎へ得た事は洵に慶賀に堪へない次第である。本年は原先生が開會の辭に代ふるに「歐洲外交の性格」について講演をされ、時節柄と云ひ、殊にヨーロッパ史の深き含蓄より出づる一言一句は來會者一同に多大の感銘を與へられた。引き續き講演者交々立つて日頃研鑽の一端を吐露され、暮れ易き秋の午後を學問に對する興奮の中に過ごしたのであつた。

講演會終了後、席を改めて晩餐會懇談會に移り、原先生司會の下に遠路御來會下されし大類先生より亦東京帝大の尾鍋氏、東北帝大の河部氏本學の先輩として永川氏より夫々意義深き御話を賜はり一同打ちとけた談笑裡に九時頃散會した。

猶講演會の司會は村田、井上兩先生に御願ひした。

講演の內容左の如し、

歐洲外交の性格＝挨拶に代へて　　文學博　原　隨　園先生

一、宗教改革の一考察　　文學士　富　本　健　輔君

唯今の私の主旨は、宗教改革の原因論では無く單なる意義論でも無い。ルーテルに於けるドイツ宗教改革が占むる時代的位置に就いての考察である。ルーテルが加持力體制を崩壞せしめながら而も尙其れを繼承せる側面を有つてゐると云ふことである。恰もルネッサンス期が所謂中世と近世との二面相に於て把握されて妥當性を有てる如く、かゝる側面から一應、ドイツ宗教改革を考察せんとする。

かくて私はトレルチの所論（E. Troeltsch: Protestantisches Christentum und Kirche in der Neuezeit）を參照しつゝ、ルーテルの教會觀、救濟理念、恩寵及信仰概念、倫理と文化理念等の諸問題を通じて中世と近世との連續・非連續の構造を摘發して見た。此處にも二重相が見受けられ、所謂過渡期の性格をもつてゐることが知られ。

但し、宗教改革を單にかくの如き把握を以て終らんとするものでは無く、更に內容的に追究す可く、ドイツ宗教改革の獨自性及び世界史的課題解決の點よりの考察も亦爲されねばならない。私の本題目は寧ろ其れ以前に於ける一應の圖式的把握である。

一、ルネサンスの君主觀

文學士　會　田　雄　次君

ブルクハルトによつてルネサンスの君主が絕對的に自我の上に立ち、何物にも束縛されず欲するがまゝに自由に行動する所謂ルネサンス人の典型として描き出されてより人はルネサンスの君主をかゝるものとして敢て怪しまなかつた。しかもかゝる君主はブルクハルトによればそのまゝ藝術學問の友となり得る超人的存在である、斯樣な人間の無數の輩出は果して實際に可能であるか。ルネサンス觀の歷史を繙く者はそれが當時の歷史觀を反映するブルクハルトの理想像の投影、彼の理想人間の姿である事に氣づくであらう。成程ルネサンスの史料もかゝる君主の存在を裏書きする樣に見える。しかし君主をかく善にも惡にも超人的なる存在として表現する事は古代中世を通じての傳統でありルネサンスに初めて生れたものでない。ルネサンス人文主義者の筆の華かさによつて我々の目につくに過ぎないのである。ルネサンスの君主描寫は故に決してリアリズムではない。したがつてブルクハルトの如上の理想像の投影は史料的に許されない。ルネサンスの君主も亦通例の君主と餘り變らぬのではないか。

一、フランス史學の特性

文學士　前　川　貞　次　郎君

フランスの歷史學、主として十九世紀のフランス史學になんらかの特有な性格が見出し得ないだらうか。この樣な十九世紀フランスの著名な歷史家達、例へば Augustin Thierry, François Guizot, Adolf Thiers, François Mignet, de Barante, Jules Michelet, A. de Tocqueville, H. Taine, E. Renan, Fustel de Coulanges といつた人々を通して、ごく概括的に考へて見たい。結論を先に述べれば、政治性、哲學性、文學性とでも云ひ得るやうなものが特性としてあげ得られるのではなからうか。がそれは如何なる意味に於いてであらうか。

一、古代埃及の宗教に就いて

文學士　岡　島　誠　太　郎君

古代埃及の宗教に觀られる矛盾を先づ注意したい。木乃伊にして遺骸を朽ちぬやうに保存するのは、餘りにも有名なことながら王が死すれば昇天して太陽神 Ra の保護の下に在ると云はれるのとは、如何なる關聯があるか。死者が幽界の神 Osiris の從者となるとするならば、木乃伊を保存する必要は如何。斯かる意味はやがて、Pyramid Text,「死者の書」にある矛盾を示すことにもなるが、これが調和、妥協の試みがなかつたか。あるとすれば如何になされたか。茲に、埃及人の宗教觀を通じて、何かを把握出

來ると信じる。

然も、埃及人が矛盾を感ずるとしても、我等の理性を以て判斷する程度ではなかつた。即ち埃及人が矛盾と考へた範圍を採りながら、如何にして之を調和、妥協せんとしたか。これはやがて古代埃及人を確知する基調となると思はれる。

この意圖を以て、古代埃及の宗教を述べる。從つて、宗教の全面的考察までには進み得ない。

一、Kalam なる語に就いて

文學士　中原與茂九郎君

――シュメール人の國家意識發生の考察――

メソポタミア史上、國家が都市國家形態から民族國家としての統一國家形態に發展移行するのは西紀前二九世紀頃であつた、それは都市國家ウムマより興つたルーガルツアギシ時代であると考へられる。而して都市國家の統一國家への發展的解消の重要契機は都市國家ラガシュの國王ウルカギナの國家改革事情の中に之を窺知することが出來る。扨ウルカギナを滅し、其他シュメール諸都市國家を征服統合したルーガルツアギシはその稱號を lugal Kalam-ma と彼の碑文に記銘してゐる。彼の使用した kalam なる語は現今のアッシリア學者によつて "Land" "Sumer" と解釋されてゐるが、この一般的語意の外に、ルーガルツアギシは Kalam に「國家」「强國」といふ特殊的意味を持たせて使用したであらうことを、この文字の起源及彼の碑文等によつて究明して見たい。同じ文字が kanaḫ と讀まれ、「民族」「國民」の意味に、後年ラガシュのパテシ、グデア時代に使用されてゐるが、これに就いては別の機會に觸れたい。

一、專制君主としてのリエンツオ

文學士　平塚　博君

コーラ・デイ・リエンツオ並びに彼のローマ復興運動に關しては從來之を一時的偶發的事件と考へ勝ちであり、ブルダッハ其他は之に重大な意義を認め、之を以て新イタリヤ國民運動の始まりと考へ、又其の意義を輕視するブランデイ其他は、之を以て何等新らしきものの萠芽を含まぬものとする。從來の諸研究に於ける見解の對立は如何にして克服さるべきであらうか。私は彼のローマ復興運動が、十二世紀末以來北伊に始まり次第に中伊に及びつゝあつたコムーネの專制君主政化と云ふ時代の壓倒的動向と結びついたと云ふ點に、上述の問題に對する一つの解答の手掛りを得たいと思ふ。即ちリエンツオのイタリヤ諸都市大同盟の計畫と實行、全イタリヤ人へのローマ市民權付與宣言等に現はれた思想上並びに實際政治上に於ける都市ローマ的なるものより全イタリヤ的なるものへの發展擴大は、小規模な中世都市國家に適應した寡頭的コムーネより、より大なる領土的國家に即應した個人獨裁制への力强い時代的潮流と云ふものとの聯繫によつて、はじめて理解される現象と考へられるからである。而して此の點にこそ都市ローマ的局地的限界を出でなかつた從來の一聯のローマ復活運動とは異るリエンツオ革命の新らしき獨自的な意義が存するものと思ふ。

卒業生送別豫餞會　昭和十六年十一月二十九日、午後六時より、於東洋亭開催、原教授、井上、村田、前川の三講師を始め參會者

二十名、食事後原教授以下先輩諸氏卒業生に對して餞の言葉を送らるれば、卒業生亦交々立つて謝辭並びに在學中の感想を述べ、一同和氣藹々の談笑裡に八時頃散會した。

例會　昭和十六年十二月一日、午後六時より於樂友會館、本年度第四回例會を開催原教授、井上、村田、前川の三講師を始め參會者十八名。

一、F. Strich; Renaissance und Reformation　二回生　植村雅彦君

一、E. H. Carr: Britain　二回生　八丁敏臣君

例會　昭和十六年十二月十八日、午後一時半より於陳列館貴賓室第五回例會を開催、原教授、井上、前川の兩講師を始め參會者十五名。

一、H. v. Treitschke: Deutsche Geschichte des 19 Jahrhunderts　二回生　定本眞一君

讀史會

例會　十月二十五日(土)　午後六時半より日佛學館小室に於て開催。西田教授、藤助教授、柴田、東伏見兩講師以下出席者三十五名左記の研究發表に就いて盛んな討論を行ひ九時半散會した。

一、說話的歷史叙述に關する二三の問題　三回生　平松玲三氏

一、文化類型學と事實主義　岩城隆利氏

秋季大會　十一月二十九日(土)　午後一時より日佛學館大ホールに於て開催。本年は二十二・二十三兩日の史學研究會と分離して開催したにも關らず、遠近より參會する者堂に滿ち、左記の講演を開いて六時一應會を閉ぢたが、引續き樂友會館パーラーに於て晩餐會を催した。出席者西田教授、中村、藤兩助教授、魚澄、柴田、東伏見三講師以下四十二名、近來に無き盛會であつた。

一、筑紫樂派に就いて　大築邦雄氏

一、名臨紙の歷史に就いて　高木隆氏

一、海外市場の形成と陶磁器業——京都陶磁器會社を中心に——　奈良本辰也氏

一、藤原時代文化の性格　池田源太氏

一、日本藝術に於ける强と弱　西堀一三氏

一、神社と祖先崇拜の問題　柴田實氏

一、慈雲尊者に就いて　魚澄惣五郎氏

例會　十二月十三日(土)　午後一時より陳列館貴賓室に於て開催三回生平松、北原、平田三君の卒業論文梗概、及び大石良材氏の「山崎闇齋の學問に就いて」と題する研究發表があり、終つて第二教室に席を移し西田教授、藤助教授以下約二十名出席して卒業生豫餞茶話會を開き七時散會した。

例會　昭和十七年一月二十七日(火)　午後六時より樂友會館七號室に於て本年最初の例會を開く。出席者西田教授、藤助教授、柴田、東伏見兩講師以下三十名、左記の講話があつて九時半閉會した。

一、沙彌生活と日本僧界の新體制

二回生　梅原隆章氏

一、昭和十六年度の京都府寺寶調査に就いて　赤松俊秀氏

學士院の宸翰調査

今回帝國學士院は紀元二千六百年奉祝會の依囑を受けて「宸翰英華」を編纂する事となり、十月下旬關西方面の第一回調査を行つた。本學國史研究室へは十月三十日午前九時、辻善之助、瀧精一、山田孝雄、市村瓚次郎、狩野直喜、新村出、岩橋小彌太、相田二郎、田山信郎の講師が來室され、又此の調査事業を囑託された西田教授、赤松俊秀、田井啓吾、村山修一氏等國史研究室關係者も參加して、研究室所藏の中院文書を始めとする宸翰類及び寄託中の勸修寺文書等を午前九時より午後四時に亘つて調査した。

東洋史談話會

大會　十一月二十三日(日)　午後一時より樂友會館講演室に於て開催。宮崎助教授の開會の辭に始まり、左記十氏の研究發表の後那波教授閉會の辭を述べられ、午後六時過ぎ盛會裡に第六回大會を終了した。引續き懇親晩餐會を開き午後八時過ぎ散會。

一、唐代の提錢について　田中整治
一、後期李朝の朱子學　石井壽夫
一、鄉・亭・里に就いて　小畑龍雄
一、河西碩西節度使の起源を論じて開元七年の十姓可汗の問題に及ぶ　佐藤長
一、宋代に於る明礬の專賣制度　佐伯富
一、河西玉國　藤枝晃
一、烏桓族に關する一二の考　内田吟風
一、南北朝音樂についての一私見　瀧遼一
一、三長齋月について　塚本善隆
一、王安石の黃河治水策　宮崎市定

卒業生豫餞會例會　十二月十日(水)　午後五時より樂友會館に於て開催。會食後、山口、柳田、藤田、善峰、野邊、長谷川、李の七君より卒業論文の梗概に就て談話があつた。那波教授、宮崎助教授以下出席者十六名。

支那學會大會

十一月三十日(日)　午後一時半より文學部第七教室に於て開催

一、支那山岳佛教の成立　宮川尚志
一、南宋詞の特質　中田勇次郎
一、周代の世界觀　平岡武夫
一、歷史上より見たる北京の國都的性格　田村實造
一、性論　本田成之
一、聯句淺說　青木青兒

東方文化研究所公開講演

十一月八日(土)　午後一時より同所講堂に於て創立記念日講演として次の話があり、同時に吉金書籍拓本の展觀も行はれた。

一、唐代地理學概觀　森鹿三

一、支那建築術について　竹島卓一
一、鵡尾考　松本文三郎
一月二十四日(土)午後一時より最近歸國せられる同所講師兼本學文學部講師傅芸子氏送別講演會あり。
一、日本佚存の中國戲曲殊に濱調曲選に就いて

地理學談話會

大會十一月三日(月)午後二時より史學科第一教室に於て開催。室賀講師の開會の辭について左記五氏の研究發表あり、小牧教授の閉會の辭あつて後、席を樂友會館に移して懇親會をひらいた。

一、水都の經濟史　和田篤憲氏
一、琵琶湖資源開發問題　吉田敬市氏
一、滿洲國綜合立地計畫と地域制　米倉二郎氏
一、東亞共榮圏　藤田元春氏
一、植民地理の若干の問題　田中秀作氏

小川博士著作年表補遺

李唐本後漢書の考察　桑原博士還曆記念東洋史論叢　支那學　六、一
支那に於ける圍棋の起源とその發達　支那學　七、七　八、一
内藤湖南先生の追憶　支那學　九、七
神農本草經以前の本草學知識　本草　八
百鍛刀と宿鐵刀　ドルメン　九、九
内藤湖南博士を憶ふ　歴史と地理　九、九
長江流域の鑛物資源　大阪毎日新聞社編楊子江　十三、九
圍棋　富山房編國史辭典　十五、二
相州物の起源と謎の正宗　報和新聞　十六、十

會報

◇役員移動

前號役員改選にあたつて、左の如く役員の移動が行はれた。即ち、編纂主擔任那波教授に代つて原教授が、庶務・會計主擔任小牧教授に代つて那波教授が就任、編纂主任内田委員に代つて新たに井上委員が、庶務會計委員平山氏に代つて外山委員が、また稲葉委員(國史)に代つて内藤晃氏がそれ〴〵委嘱せられた。

◇昭和十六年度會計報告(昭和十五年十一月昭和十六年十月)

總收入	一三一二・八八
内譯前年度繰越金	六五三・四六
史林印税	六四〇・〇〇
諸利子	一四・四二
雜收入	五・〇〇
總支出	九七五・九二

內譯大　會　費　三六五・八四
例　會　費　一九・二四
役員手當　一六七・〇〇
執筆者謝禮　一六九・七〇
會務費　二四四・一四
差引殘高　三三六・九六
次年度繰込
以上

◇會員動靜

◇入　會

京都市左京區京大寄宿舍內　直木孝次郎氏
同　淨土寺南田町一八八湯淺方　豐田吉雄氏
同　田中大久保町二六　富本健輔氏
（豐田堯氏紹介）
同　北白川上池田町九二　吉見方　大槻隆氏
（藤岡謙二郎氏紹介）
神戸市神戸區北野町四丁目八七ノ一　池田正一氏
（毛利久氏紹介）
大連市兒玉町七　教科書編輯部　久原市次氏
京都市左京區下鴨本町一　藤田國雄氏
同　上京區紫野上柳町一〇　柳田陽一氏
豐中市大字柴原　浪速高等學校內　原正氏
東京市淀橋區下落合一ノ三〇六　華園茂氏
學習院高等科寄宿舍內　北原一敏氏
同　杉並區和田本町九四六
（右五氏外山軍治氏紹介）

◇轉　居

京都市上京區大宮泉堂町五七　豐田堯氏
鎌倉市雪の下　神奈川縣師範學校內　古川正男氏
京都市中京區兩替町通丸太町下ル　藤原利一郎氏
兵庫縣芦屋法泉寺一六三二ノ二　山口格太郎氏
兵庫縣武庫郡御影町石屋朝後五八〇　鹽見高年氏

◇死　去

京城府倭城臺町三番地三號官舍　大谷勝喜氏
謹んで哀悼の意を表します。

◇寄贈交換圖書

概觀國史　中村直勝著　北海出版社
軍事史研究　六ノ五　軍事史學會
考古學雜誌　三二ノ一　日本考古學會
考古學上より見たる熱河　滿洲古蹟古物名勝天然記念保存協會
國民精神文化　七ノ一一、八ノ一　國民精神文化研究所
國學院雜誌　四八ノ一　國學院大學雜誌部
國語・國文　一二ノ一、二　京都帝大國文學會

史淵　二六
史學雜誌　五三ノ一、二
史迹と美術　一三ノ一
人類學雜誌　五六ノ一、二五七ノ一、二
斯道文庫報　五、六
社會學徒　一五ノ一二、一六ノ一
社會經濟史學　一一ノ九、一〇
神社と產業　視宮靜著
第一回展觀目錄
第二十七回火藏會展觀目錄
臺大文學　六ノ六
哲學研究　二七ノ一
同　顧　二ノ一〇
東洋史研究　六ノ五
長崎談叢　二九
日本話學研究　一五、一六、一七
日本學研究　一ノ二
文　化　八ノ一二、九ノ一
民族學年報　三
無　閉　之　五七、五八、五九、六〇
蒙　古　八ノ一一、一二、九ノ一、二
遼金の古城　一
龍谷史壇　二八

九州史學會
史學會
史迹美術同攷會
日本人類學會
斯道文庫
社會學徒社
社會經濟史學會
皇典講究所國學院大學講話集第十四輯
根岸美學館
東京大藏會
臺大文學會
京都哲學會
北京佛教同願會
東洋史研究會
長崎史談會
日本文化中央聯盟
日本文化研究所
東北帝大文學會
民族學研究所
むかしの會
滿洲古蹟古物名勝天然記念物保存協會
善隣協會
龍谷史壇編輯部

歷史地理　七九ノ一、二
歷史と國文學　二五ノ五、二六ノ一
歷史學研究　九四

日本歷史地理會
太洋社
歷史學研究會